

〔書評〕

ウェスレー・アリアラジャ 中嶋正昭訳

『聖書と他宗教の人びと』

日本基督教団出版局 一九八七年

倉 沢 正 則

本書は、S. Wesley Ariarajah, *THE BIBLE AND PEOPLE OF OTHER FAITHS* (World Council of Churches, Geneva, 1985) の邦訳である。世界教会協議会 (WCC) の "The Risk Book Series" の第二十六番目の出版物であり、極めて重要な課題を取扱ったものである。

「福音と諸宗教」は、宣教學の取扱う分野の一つである。宗教多元化の潮流の中で、他宗教に対するキリスト教の立場は、それを偽りとして拒絶する排他主義 (exclusivism) 、それをキリスト教的に意味づける包括主義 (inclusivism) 、そして諸宗教は一つの神的存在の様々な表出であるとする多元主義 (pluralism) に類型される。さらに、他宗教に対する態度として別の四つのモデルが指摘されている。すなわち、「教会中心」(ecclesiocentric) 、「キリスト中心」(christocentric) 、「神中心」(theocentric) 、「救済中心」(soteriocentric) である。本書は、スリランカのメソジスト教会の教職者というアジア人が著者であるゆえに、われわれにとって意義深いものである。

さらに、現在WCCの「諸宗教との対話」部総主事として取組んでおられるなかでの一つの結実として、本書を受取めることができる。

著者は、「神中心」態度をもって、他宗教の人々との真実な「対話」を目ざしている。そして、とかく対話に反対する意見の多くが、聖書に基づいていると主張されていることに果敢に挑戦し、「何とかして他宗教の人々に対する新しい態度が示せるような理解が得られることをのぞんで、聖書の別の側面を示そうと試み」(一八頁) ている。その明白な論点は、今やキリスト教界において注目され、その視点は、急速に好評を博しつつある。

「他宗教の人々」との「対話」的関係構築という著書の議論は、傾聴に値する。これは確かに今まで無視され見過ごされてきた事柄であり、福音派の人々は、排他的な聖書個所より他宗教の人々を拒絶し断罪する傾向にあったことは否めない。著者の意図は、他宗教の人々との真実な「対話」を阻んでいる「キ

リストの排他的な主張」に新たな解釈的視野を提供することに
ある。その確信は、他宗教の人々との「対話」的關係こそ、聖
書の中心的メッセージであるとする（七九頁）。しかし著者の
聖書理解は、歴史的文書としての聖書というよりも、イスラエ
ルや初代教会の信仰を反映する第一の handbook (example) であり、
神についてのユダヤ的自己理解とイエス・キリストに関する信
仰の編集所産としての聖書であるという視点を始めに記してお
きたい。この前提に立つて著者は、聖書におけるキリストの排
他的な主張というものが、絶対的真理というようなものではな
く、キリスト者のみに意味のある關係的真理だと主張する。ゆ
えに、他宗教の人々に語る際に、キリストの排他的主張をもつ
て、傲慢に語るのではなく、彼らを同じ巡礼者として受入れ、
愛し、謙虚な態度をもつて接する必要があると主張する。

この書評において、著者の聖書理解や前提の相違を踏えたと
うで、なお疑問と感ずるところを指摘してみた。

第一に、聖書が、神に関してイスラエルの自己理解であり、
初代教会の信仰を反映させたものであるか否かはさておき、聖
書は、イエス・キリストによる神の自己顕示であることを示す
だけでなく、神が教会に属する人々にも、属さない人々にも、
具体的なメッセージを携えた書物であるのではなからうか。メ
ッセージは、「聞かれ」なければならぬ性質を有している。
著者は、ヨナと二ネベ、ペテロとコルネリオの記事を、様々な
信仰の人々との出会いという観点から、契約共同体の外にある
人々にも、神は関心を寄せておられる例証として取りあげてい

る。確かに聖書は、神の主権がすべての被造物におよび、神の
愛と憐れみは、いかなる国や民に限定されるものではないこと
を告げている。神は、二ネベの人々を深い憐れみをもって取扱
われた。けれども著者は、メッセンジャーとしてのヨナの役割
を見落しているのではないだろうか。権威のあるメッセージを
彼に委ねられた神は、ヨナが他宗教の人々に対して誤った考え
方をもち、神のご計画や御旨に無知であつたとしても、彼を遣
わされたのであつた。ヨナのユニークで具体的なメッセージの
宣教によつて二ネベの人々は悔改めに導かれ、ヨナを遣わされ
た神に祈つたのである。二ネベ（他宗教）の人々は、主なる神
の御前における自らの邪悪さが町を崩壊させるほどのものでは
あることを、理解していなかった。ヨナのメッセージは、その現
状に彼らの目を開かせ、その邪悪さを悔改めさせるものとなつ
たのである。その結果、二ネベの人々は、神の深い憐れみを体
験したのであつた。ヨナのユニークなメッセージが人々の心
を変えたものではなかったのか。

さらに著者は、ペテロとコルネリオを取りあげ、非常に洞察
に満ちた新鮮な解釈を提供している。コルネリオは、「神を敬
う者」であり、彼の祈りは神に覚えられ、その施しは喜ばれて
いたと聖書は告げている。著者は、「その（ペテロの）メッセ
ージを開く遙かに以前から、彼（コルネリオ）は神との特別な
關係の中にあつた」（五一頁）とする。そうだとすると、聖書
はそれで良しとほしない。さらにコルネリオは、はっきりとし
たイエス・キリストのユニークなメッセージを聞く必要があつ

たことを知るのである。確かにそこにペテロの新たな神理解の経験はあったが、ペテロは、コルネリオに遣わされたのであった。その派遣は、イエス・キリストのメッセージを伝え、悔い改めと信仰による、神の豊かな救いを、異邦人にもたらすこととなったのである。

第二に、キリストの排他的な主張という問題において、著者の見解、すなわちキリストの排他的な主張のすべては、キリスト・イエスについての信仰の表現（表明）であり「唯一」という点を過度に強調しているのは、キリスト者がユダヤ教から離れて、徐々に独立した集団となりつつある時期に、そのユダヤ教の人々との論争のなかから出てきたもの（六一―六二頁）ということを受入れたとしても、一つの問題が生じる。それは、何故イエスは十字架につけられたのかということであり、キリスト者はなぜ迫害されたのかということである。イエスが十字架につけられたのは、自らについての極めてユニークな、はっきりした主張の故ではなかったのか。それとも、当時の人々や、宗教的・政治的権威に対してあまりにも傲慢な態度をとった故であったのだろうか。キリスト者たちが迫害を受けたものでは、排他的なイエス・キリストのメッセージを伝えた故であったのか、それとも、ローマ帝国に対して傲慢な振舞に出たからであったのか。十字架につけられたキリストのメッセージは何故ユダヤ人にとってはつまずきであり、異邦人にとっては愚かであるのか（Iコリ―23）。そこには、キリストの排他的な主張といささかの関連がないのであろうか。

第三に、キリストの排他的な主張が、本当に他宗教の人々との対話の妨げとなっているのかということである。キリストの絶対唯一無比の主張は、高慢な行為なのだろうか。あるいは、他宗教の人々に対して、時と所をわきまえない「まっすぐに宣言する」(straight proclamation) 宣教のスタイルが高慢な態度であるのか。「多くのキリスト者は、ほかの人々の福音をきく必要性についてよりも、自分自身が証しをしなければならぬ責任があるということに、より強い関心を示すのではないだろうか」(二〇九頁) という意見には共鳴できるし、また「キリスト教の証しが、自分自身の関心や義務感または自己満足に基づいてなされている」(一一〇頁) ということも否定できない。さらにまた、過去において第三世界の人々が、西洋植民地主義と随伴したキリスト教宣教の「白人の重荷」という傲慢なアプローチのゆえに苦しんだことも確かである。聖書的な証しは、「受肉、自己犠牲、神の国のしるしを指し示すことは、ほかでは受け入れられない人を受け入れること、われわれの生涯を分かちあうこと」(一一〇頁) との関連で考えられねばなるまい。しかしキリスト者は、「委託と責任」と「証しにおける受容と自己犠牲」との両者が必要ではないのか。傲慢の危険は、キリストのいわゆる排他的な主張にあるというよりも、他宗教の人々に対するキリスト者の優越感的態度にあるといえないだろうか。キリスト者は福音によって変えられ、その特異性を確信しつつも、他宗教の人々にキリストの価値を宣傳伝えることにおいて謙遜な態度をもって接することが大切である。謙虚さは

キリストに似る者としてのキリスト者には当然のことであるし、さらに少数者である第三世界、とくにアジアのキリスト者には、必然的にそうならざるを得ない状況に置かれている。キリスト者は、他宗教の人々に対して、尊敬と寛容をもって、しかも宗教・文化的適切さをもってユニークな福音も聞かせてゆかねばならない。この意味において、他宗教の人々との対話はとても重要であり、それによってキリスト者は、彼らのメッセージや主張を聞き、現世や来世への宗教的な探求を理解することができる。キリスト者も他宗教の人々も同じ人間であり、無力さを覚え、神または究極的實在の前に罪深く盲目であるという意味において、同じ巡礼者であることを認める。彼らの渴き、求めよりその世界観やシンボル、そして祭儀を通して彼らの神（究極的實在）理解を得、それがキリスト者自らの神理解を豊かにすることを知っている。そしてそのような理解を背景に、福音宣教の「接点」を見出すことができるのである。

著者の他宗教の人々との真実な対話ということの目指すものは、キリスト者が他宗教の価値を研究し、彼らから学び、「彼らとともに調和をもって生きる」ことであることを指摘しておきたい。対話的關係によって、キリスト者が、一つの神を色々な宗教において、それぞれに理解することを発見することが求められるのである。著者の「キリスト教の神、ヒンズー教の神、イスラム教の神があるのではなく、神についてのキリスト教の理解、ヒンズー教の理解、イスラム教の理解があるのみだ」（三七頁）という主張は、それを裏づける。これは「対話の神

学」を「神中心的」な態度決定にもとづいて構築しようとするものである。この視点から著者は、「神の宣教」についての聖書的概念を、われわれと他との関係の根拠としてとらえなおす（一四五頁）必要を語り、キリスト教宣教と神の宣教を同一視せず、大きな神の宣教の一部分にすぎないことを覚えるべきだと主張する。神の国のしるしはキリスト教社会以外にもみられるという視点に立つ。しかし、著者が、神の国は境界を知らず、ただしるしによって知られ、そのしるしは、キリスト教共同体以外のところでは知られると語るとき、そのしるしの内容を明記していない。聖書から理解できる神のしるしとして少なくとも七つ挙げることができる。イエス・キリストの中心性、すべての人々（特に貧しい人々）への福音宣教、悪霊追放、いやしと奇蹟、回心、御霊の実、キリストゆえの苦難である。著者は、「聖霊は人の心に触れ、われわれが知ることのできない方法で状況をとらえ、あらゆる場所ですべての種類の人々の中に働く神のわざをみわける可能性を開いてくれる」（一四四頁）と強調するが、「神のみわざをみわける」とはどんな意味なのか、「神の救いのみわざ」なのか、それとも、「神の御旨の新しい表出」なのか、むしろ、「聖霊は人の心に触れ、われわれが知ることのできない方法で状況をとらえ、イエスをキリストと証しさせ、天にも地にもいつさいの権威が与えられた方をほめたたえさせる」ことではなかったのか。神の王的支配とは、キリストの主たることであり、「教会」こそ唯一の、神の宣教に呼び出されている王の共同体ではなかったのか。王には他の

共同体があるのだろうか。

最後に、著者の聖書に対する見方は、われわれ福音的キリスト者とは違うけれども、本書は、「絶対無比の福音」を「まっすぐに説き明かす」キリスト中心的な方法で、対話的というより、論争的なわれわれの他宗教の人々に対する態度やあり方を再検討させてくれるものであり、陥り易い危険や誤ちを指摘してくれるものである。他宗教の人々をどうキリスト者として位置づけ、理解し、対話のなかでどう真正なキリストの証しができるのか、考えさせられる書物であることは確かである。

〔宣教学 専攻〕